

令和 6 年 5 月 25 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H01198

研究課題名（和文）宗教理論の思想史的再検討を踏まえた現代的宗教思想研究の条件と可能性を巡る研究

研究課題名（英文）Research on the conditions and possibilities of a contemporary study of religious thought: On the basis of a conceptual-historical reconsideration of the theories of religion

研究代表者

久保田 浩 (Kubota, Hiroshi)

明治学院大学・国際学部・教授

研究者番号：60434205

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、宗教思想研究の現代的可能性を以下の点に見出した。まず、一般概念としての「宗教」の理論化を宗教思想として捉える分析的視座。次に、特徴的な宗教理論および関連する諸概念の思想史的・受容史的文脈という分析対象、特に理論が生まれた具体的な宗教的文脈への着目。第三に、単なる歴史的位置づけや批判にとどまらない、思想的展開の可能性への着目。宗教学的宗教理論（M・エリアーデとJ・ヴァッハ）、社会学的宗教理論（G・ジンメル）、神学的宗教理論（A・ハルナック）、宗教理論に基づく新たな学知の構想（G・ヴィーコ）を主な事例とし、一般的「宗教」の理論と具体的な宗教史的文脈との関連を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の宗教研究は、「宗教思想」を対象として研究を進める分野と実証研究との間に溝が穿たれている状況にあるが、本研究は、「宗教」について語るあらゆる種類の宗教研究を枠づけている宗教理論化の構造自体に目を向けており、思想研究と実証研究とを架橋する一つの可能性を提示している。同時にそれは、狭義の宗教研究の枠を超えた学問論的可能性をも示唆している。一方、本研究は従来の宗教思想研究に対する歴史的反省を前提としており、「宗教を学問的に語る」という作業そのものの歴史性を問い直し、従来の宗教研究の歴史自体を西洋思想史の中に再定位することを要請している。

研究成果の概要（英文）：The research has seen certain possibilities for the contemporary study of religious thought in the following points: First, in the analytical perspective regarding the theorization of "religion" as religious thought. Second, in the definition of the object of research in the analysis of the contexts of conceptual and receptive history of theories and relevant concepts, especially by paying careful attention to their respective religious context. And third, in the search for possibilities of theoretical development of each theory, not only in its historical localization and critique. Specifically, the relationship between the attempt to theorize "religion" and its religio-historical context has been elucidated by discussing the theories of M. Eliade and J. Wach from the perspective of the "study of religions," G. Simmel's "sociological" theorization, A. von Harnack's "theological" one, and G. Vico's attempt to establish a new horizon of scientia through the theorization of religion.

研究分野：宗教学

キーワード：宗教理論 宗教思想 宗教史 宗教学 思想史

1. 研究開始当初の背景

1960年代以降、ことに80年代以降の宗教研究の自己反省の潮流は、その研究対象である「宗教」なるものの概念的・認知的構築性への自覚を促した。この「宗教概念論」は更に、「宗教」に対する系譜学的・イデオロギー批判的反省をも活発化させ、宗教研究の新たな時代の画期を形成していった(W. C. Smith, *The Meaning and End of Religion*, 1962; E. Feil, *Religio*, 4 Vols., 1986-2007; T. Asad, *Genealogies of Religion*, 1993 [邦訳『宗教の系譜』]; R. T. McCutcheon, *Manufacturing Religion*, 1997; T. Masuzawa, *The Invention of World Religions*, 2005 [邦訳『世界宗教の発明』]等)。一方ほぼ同時期に、宗教研究という一学問分野の制度的確立を前提とした方法論的・学説史的議論を超えて、この学問分野の成立・展開をその都度の政治史・文化史・学問史・宗教史的等々の歴史的文脈において捉えなおそうとする動きも現れていた(E. J. Sharpe, *Comparative Religion. A History*, 1986 [邦訳『比較宗教学』(久保田・江川監修、藁科他訳)]; H. G. Kippenberg, *Die Entdeckung der Religionsgeschichte*, 1997 [邦訳『宗教史の発見』(久保田他訳)]; A. L. Molendijk and P. Pels (eds.), *Religion in the Making*, 1998等)。こうした潮流以後の宗教研究は、宗教を本質主義的に理解し続けようが、その構成的性格の批判から出発しようが、多かれ少なかれ、これらの潮流への応答として営まれざるを得ない状況にある。

けれども、自己反省的であらざるを得ない現在の宗教研究において看過されがちな点がいくつかある。そのひとつは、以上の自己反省の営みが個別研究からは独立した「理論的」問題として論じられる嫌いが強く、具体的な事象を対象とする個別研究とのインタラクティブな関係を構築するに至らなかった、少なくともそうした関係を構築することが極めて困難であり続けていることである。「理論」を構築することとはいかなる営みであるかという問いから出発して、学問論的自己反省を具体的な個別研究に反映させることが、まず本研究において目指された。

看過されがちなまた別の点は、宗教研究の歴史は批判的に叙述されるべきであり、「宗教」概念自体に批判的の眼差しを向けるべきであるといった言説が人口に膾炙するようになった一方で、こうした言説自体が宗教についてのひとつの語りであるという事実である。勿論、そのような批判的な歴史叙述や概念批判、即ち、殊に18世紀以降の西洋における「宗教」概念構築の過程や宗教研究が帯びてきた「近代的」性格に向けられてきた批判的な眼差しは、確かにメタ次元での学問的反省の結果であることは否定できない。しかしその一方で、学問的成果が社会的に還元されていく過程で、社会内での宗教言説、果ては現実的な宗教形成に一定の影響を及ぼしていることも看過できない(後者の点は、洋の東西を問わず、近代の過程で宗教が学問化・知識人宗教化していく傾向を示し、宗教研究の成果が積極的に受容されるといった場合に顕著に観察される)。そしてその逆も然りである。ここから現れてくるのは、宗教を学問的に(殊に「宗教学的に」)語ることに社会内の宗教の実態および宗教に関する言説との間に(自覚的か無自覚的かを問わず)結ばれてしまう連関とは何かという問いである。

2. 研究の目的

以上の当初の問題意識に基づいた本研究は、まず、特に近代以降の西洋と近代西洋学問において宗教が論じられてきた過程を、諸理論家とその理論の特徴に着目して、西洋の思想的文脈(諸々の関連学問分野の学説史・学問史的な文脈をはじめ、文化史的、社会史的、とりわけ宗教史的文脈)の中に位置づけることを目指した。それによって、思想史における「宗教の理論化」という思想形成動因の歴史的特徴を明らかにし、さらに、先述した「宗教」と宗教研究に対する自己反省作業自体と宗教思想史研究との接続の可能性を探った。そして最終的に、宗教研究の一部分野である宗教思想研究の新たな方向性を検討した。

自己反省を行い続けざるを得ない現在の宗教研究の中で、宗教思想研究は従来、個別人物や個別トピックを扱う個別研究の集積体としての姿を呈していたが、そうした従来の形態とは異なる思想研究の可能性を、「宗教の理論化」という分析軸を立てて追求した。その際、以下の四つの問いを立てた。(1)近代以前の宗教の理論化において、哲学をはじめとした諸学問分野での理論化と、特定の(しかし支配的な)宗教伝統であるキリスト教の自己反省行為である神学における理論化が、どの程度、それら相互の緊張・対立関係あるいは協働関係という文脈の中に位置しているのか。(2)近代的「宗教」概念と学問的宗教研究が成立してくる過程において、一方で神学における、他方で他の近代諸学問における「宗教の理論化」に対して、宗教研究の理論化はどのように内容的・方法的差異化を図ったか、あるいは図らなかったか。(3)とりわけ1980年代以降の自己反省的な宗教研究は、自己を何と差異化しようとしていたのか、そしてどのような理論的前提を(多くの場合無自覚的に)抱えていたのか。そして、(4)宗教言説と宗教学言説という二分法を克服した宗教研究自体が可能であるとすれば、それ自身がどのような理論化のベクトルを内在させることとなるのか、そうした理論的前提から出発する宗教研究の具体的な形姿はどのようなものとして構想されるのか。

このように、本研究が目指したのは、現在の宗教研究、その中でもとりわけ「宗教思想」を対象として研究を進める下位分野の、現代的かつ将来的可能性の一端を提示することである。特に、従来、実証研究と思想的研究との間に明瞭な一線が引かれ、相互の研究成果の間に溝が穿たれている状況が続いていることから、「宗教」について語るあらゆる種類の宗教研究(のみならず、

非学問的な語りを含むあらゆる宗教言説)を根拠づけている宗教理論化の構造自体に目を向けることで、分断状況の克服を目指した。換言すれば、社会において学問システム外部での、つまり法や教育等の他の社会内システム、そして宗教システムにおける宗教言説が(自覚的・無自覚的を問わず)依拠している「宗教の理論化」の構造と、宗教研究の理論化との相互作用の解明を目指した。

従って本研究の目的は、大きく以下の二つにまとめられる。第一に、実証研究と思想研究の間を架橋するための視座を「宗教の理論化」をキーワードに模索していくこと、そして第二に、従来の宗教思想研究に対する歴史的反省を踏まえて、現代における宗教思想研究のひとつのあり方を例示することである。

3. 研究の方法

以上の目的を達成するために、本研究では以下のように具体的対象と方法を設定した。

(1)近世以降に「宗教」を理論化してきた思想家・理論家を選定し、その宗教理論を歴史的な文脈において検討するために、以下の観点から分析を進めた。まず理論家の生涯・時代背景、理論家の宗教的出自と宗教理論との関連、そして宗教理論の思想的・概念的特徴、最後に同時代および後世に与えた思想的・理論的影響。最後の点についてはさらに、現代的評価(現代において宗教思想研究を行うに際して、その理論が持つ有効性、可能性、限界の確定)。思想家の選定に際しては、宗教学の従来の教科書の学説史叙述に登場してくる人物は勿論、狭義の宗教研究の枠を超えた諸分野(哲学・思想史、人類学、民俗学、社会学、神学等々)の思想家・研究者と見なされている人々をも考慮した。また、歴史的な諸宗教(ユダヤ教、キリスト教、仏教、イスラーム等)の伝統の中で自らの宗教伝統自体の理論化を図った人物は意図的に除外し、自らの宗教伝統を考察の出発点に据えながらも、それを自覚的に「宗教」という概念の下で語ろうとした人物に限定した。

(2)近世以降の特徴的な宗教理論および概念のいくつかを(1)で挙げた人物以外からも選定し、同様に、それらの時代的・宗教的文脈、特徴、影響・受容、現代的評価を行った。

以上の分析的枠組みの下で、研究代表者・分担者を中心に研究協力者からの知見も受け、「4. 研究成果」で述べる思想家及び概念について、海外での資料調査や海外の研究協力者との共同研究を含む個別の人物やトピックを対象とする研究を出発点として、定期的な共同研究会で研究成果を共有し、批判的検討を重ねた(延長期間を含む5年間にわたる研究期間を通し、全18回の公開研究会、及び月一回のペースで個別理論に関する読書会・勉強会を開催した)。

また、歴史的かつ現代的な宗教理論の包括的な整理のための第一段階として、事典といった形態で、本研究の目的と意図が明確になるような、そして一つの研究上の方向性が提示できるような成果を将来的にまとめることを念頭に置きながら研究を進めた。その際、理論家を中心に論ずる人物篇と理論や概念を取り扱う事項篇という構成を構想しながら分析を進めていった。

4. 研究成果

研究期間を通して得られた成果と知見は大きく分けて、(1)「宗教の理論化」という営みの歴史的な文脈への位置づけ及びその現在の課題の確認と、(2)個別の理論家及び関連概念の再解釈と再評価という二つに分かれる。

(1)上で略述した、「宗教」概念への自己批判的眼差しは、決して1980年代以降に宗教研究という学問分野の内部で突如現れてきた現象ではない。むしろ以下のような観点から見れば、ヨーロッパあるいは西洋において宗教について語る営み、つまり西洋世界におけるイーミックな語りの伝統の延長線上に位置していると捉えなおすことができる。換言すれば、「宗教の理論化」という形態で殊に学問という自己理解の下で営まれた宗教に関する語りは、ヨーロッパにおいて歴史的に形成されてきた知的産物として、改めて批判的な分析の眼差しを向けることができるトピックであり、宗教に関する語り自体を歴史化する視座が求められる。

宗教研究は19世紀後半、とりわけイギリスとオランダに端を発する近代学問として誕生したとされることが多いが、その歴史はまさに、同時代の社会内のある問題領域あるいは問題群に「宗教」という概念を充て、ある現象領域を画定すること、そして同時代のみならず過去や非西洋の中にも類似の問題領域あるいは問題群、そして現象領域を見つけ出し(所謂「宗教史の発見」)、その思想的・実践的特徴や社会内的機能および構造、果てはその人類史的意義を解明し、人間存在と社会にとっての「宗教」なるものの「真理」を「直観」すること(theoria)を目指す営みであったと言える。そして、そうした「宗教」概念を前提とする宗教研究に対して自己反省的に批判の目を向けるようになった先述の営みもまた、この概念の「非真理」をポスト近代批評的に「直観」することを目指す営みであることに変わりはない。こうした意味において、近代以降の(そしてポスト近代の)宗教研究自体も、さまざまな形姿をとって現れてきてはいるものの(宗教の意味・機能・構造の解明、宗教の定義の模索、宗教概念批判、系譜学的批判、ポストコロニアル批評的分析等々)、いずれも「宗教の理論化(theorization)」の試みに他ならず、その都度、ある特定の「宗教理論」を提示していると特徴づけることができる。

こうした「宗教の理論化」は、19世紀の中葉に近代学問として宗教研究が確立する過程においてはじめて現れてきたものではない。古典古代のギリシアにまで遡る必要はないが、たとえば、啓蒙主義における宗教批判や理神論等を「宗教の理論化」の嚆矢と見なすと見立てるならば、D. ヒュームの『宗教の自然史』(1757年)以来、宗教の理論化は絶え間なく行われてきており、現在わたしたちが「学問」の名の下に行っている営み自体も、思想研究のみならず、いわゆる実証的と呼ばれる研究も、さらには人文社会科学のあらゆる分野において「宗教」を論ずる研究も含

めて、こうした伝統の延長線上に位置していることがわかる。

さらに重要な点は(これは、従来見落とされがちであった点として上で指摘した二つ目と密接に関連しているが) 宗教への反省的な理論化は、歴史的に現れてきた諸宗教を観察し、考察する地位に自らを置く自称学者によって独占されてきたわけでは決してなく、今でもそうではないという事実である。すなわち、宗教の理論化の発端(少なくともその一部)は歴史的に見れば、ある特定の環境に置かれた個別の宗教集団が強いられた自己反省的作業(他者を同定し、それとの差異を確立することによって自己を同定しようとする作業)の中に見いだされる。しかも、こうした自己反省は(宗教史的な例を挙げるとすれば、例えば、ヨシヤ改革期のユダヤ教や初期キリスト教に見られるような)意識的な自己変革・自己形成が必要とされた場面のみで行われた作業ではなく、自己アイデンティティの追求という形で常に、とりわけ宗教多元的状况が顕在化してくる18世紀以降現在に至るまで顕著な形で見出される。更にこうした個別宗教による「自宗教」の規定の試みと並んで、一般概念としての「宗教」そのものを規定しようとする自己反省的理論化が並走してきた(前者の「自己」は勿論、自宗教を指すが、後者の「自己」は「宗教」とは異なる語りを行うとされた学問的自己である。宗教と学問の自己反省については、例えば以下で論じられている。N. Luhmann, *Die Religion der Gesellschaft*, 2000 [邦訳『社会の宗教』])。

こうした観点からすれば、従来の二つの言説的区別の妥当性自体も問われざるを得なくなる。まず、宗教学言説と宗教言説との区別である。というのも、この両者の区別自体が、近代的「宗教」概念の確立とともに定着した世俗/宗教という二分法に依拠する宗教学言説の前提理解そのものであって、この区別あるいは画定自体が、宗教に関するひとつの理論化に他ならないからである(なおこれは、既にT. Asad, *Formations of the Secular*, 2003 [邦訳『世俗の形成』]等によって指摘されてきた点でもある)。ふたつ目は、宗教事象を実証的に語る言説と思想研究として論じる言説との区別である。なぜなら、前者の実証的分析の構えはすでに、前分析的な宗教理論化を前提とせざるを得ず(たとえば、宗教の構成要素として、信念と実践という二項を措定する等) 後者の思想的な研究も、対象とする思想と分析する際の理論化との相互作用の中でしか成立しないからである(この点は、以下でも指摘されている。H. Lenk, *Schemaspiel*, 1995)。

以上の「宗教の理論化」という営みの歴史的・現在的課題の認識は、本研究課題メンバーによる以下の個別理論家研究の成果との相互作用の中で得られた総合的知見を、研究代表者がまとめたものである。

(2) 上述したように、本研究では、選び出された理論家による「宗教の理論化」を改めて歴史的文脈の中に位置づけた上で、その理論的可能性を再評価することを目指した。以下で略述する研究代表者・分担者による研究成果の他に、共同の研究会・勉強会・読書会にて、宗教現象学者G・ファン・デル・レーウ、心理学者W・ジェイムズ、哲学者L・ヴィトゲンシュタイン、民俗学者折口信夫の「宗教理論」に関し、それぞれ研究協力者の木村敏明氏、堀雅彦氏、飯田篤司氏、津城寛文氏から専門的な知識の提供を受け、知見を深めていった。さらに宗教理論を構成する重要な概念のひとつである「一神教」概念の成立史・研究史に関して、山我哲雄氏との研究交流を行い、特定の思想家に限定されない宗教理論の分析の可能性について検討を行った。

以下、共同研究における研究者間の相互作用の中で、研究代表者・分担者それぞれの視点から遂行された個別理論家研究から得られた知見を記しておく。

宗教学者ミルチャ・エリアーデ宗教理論(分担者鶴岡賀雄)。二十世紀の中葉に広く歓迎されたエリアーデの宗教学は、その後さまざまな観点から批判され、今日では省みられることも稀になっている。宗教研究史上における、この「エリアーデ現象」ともいべき事態を反省的に考察することで、今日の宗教研究が直面している課題を以下のように自覚することができた。(a) 近代の宗教学は、諸宗教が説く真理をそのまま受容することができなくなった知識人が、近代的学問知の枠組みの中で「宗教の真理」を語り直すことで、宗教の存在意義を承認しようとする欲求に根ざしたものと側面がある。エリアーデの宗教理論は、その鍵語と言える「ヒエロファニー(聖なるものの自己顕現)」等の概念が孕む本質的曖昧性の故に、宗教学者の宗教的(神学的)欲求と学術的欲求をともに(ある程度)満たすものとして受け取られ、これがエリアーデ宗教学の流行を支えたと解される。(b) エリアーデ批判はこの曖昧性を突き、エリアーデ自身および宗教研究者の研究活動の根底にある意識的・無意識的な欲求を露呈させるものだったと総括し得るが、宗教研究活動を駆動する根本欲求の性格をめぐる問いは、普遍的な重要性を有して存続している。(c) 近代宗教学の底に流れる欲求をある曖昧さのもとに掬い上げて成功したエリアーデらの宗教学を「批判」によって解体し、宗教をめぐる学的言説を、神学、宗教哲学、個別宗教研究、社会学、心理学、認知科学等に分断して交流困難にせしめるのではなく、(エリアーデが志向した総合知とは別のかたちで)連携的に共存させるあり方を探ることが、宗教研究の今日的課題であると思われる。

宗教学者ヨアヒム・ヴァッハの宗教理論(代表者久保田浩)。20世紀初頭のドイツで「宗教学の神学からの独立」を唱えたヴァッハは、宗教へのアプローチの経験科学的性格を強調し、思弁的・規範的ではない宗教研究の学問性と学問的自立性を喧伝したとされる一方で、晩年の合衆国滞在期には神学や宗教哲学との総合を果たした新たな人間学の創出に関心を向けたことが、前期の宗教研究理解からの離反であり、疑似神学化であると批判され、彼以後エリアーデにつながるシカゴ学派の宗教研究に対する批判の端緒に据えられてきた。けれどもこうした科学 vs(疑似)神学という対立図式はその後の宗教研究の自己理解を巡る論争の中で彫琢されてきた側面も大きい。ヴァッハは終生、宗教学を経験的な宗教史学と体系的宗教学という両輪から構成され

る学問として根拠づけるという作業そのものが「哲学的」課題であることを強く意識し、宗教はそうした「哲学的」作業によって構築された諸概念に基づいてのみ理解可能であるという立場を貫いており、ヴァッハの「転向」をめぐる議論は相対化されるべき必要がある。この点は、彼が現在の宗教研究に残したひとつの課題、即ち彼が単数形の「宗教」という概念が経験的データからのみ帰納され得るものではなく、構築されざるを得ないと認識していた点と密接に関係している。「宗教」は決して帰納的に把握し尽されることはない故に、宗教についての語りは個別的な歴史的事象を記述する概念では捉えられない抽象性を有さざるを得ないという認識に基づき、彼は「一種の宗教的文法学」の構築を要請した。この要請は、宗教研究の自己反省作業の中では忘却されたが、哲学的・神学的規範性 vs 経験的科学性という二項対立に陥らない、別のタイプの宗教についての語りを模索する際の有益な視座を提供してくれるものと考えられる。

社会学者ゲオルク・ジンメルの宗教理論（分担者深澤英隆）。これまでジンメルの宗教理解に明確な理論的特徴があることは、十分理解されてこなかった。しかし『宗教』（1906/1912）をはじめとする宗教を主題としたジンメルのすべてのテキストを検討すると、以下のような理論的主張が見出される。進行する世俗化と、宗教的実在論のリアリティー喪失という同時代西欧の厳然たる事実を踏まえて、ジンメルは何よりも宗教／宗教性の二分法を宗教理論の主軸とした。この二分法のなかで「宗教」が意味するのは、ドグマや組織をそなえた成立宗教であり、他方で「宗教性」(Religiosität)とは宗教成立の根底にある人間のアプリオリな素因であり、主観的な生の存在性であった。ジンメルのこうした宗教理解は、宗教を既成宗教、のみならず宗教的表象一般から切り離し、いわゆる機能的宗教定義に立つ宗教理解へと導くものとなった。またこの二分法は、生の哲学に深くコミットした時代になると、生と形式という文化論的な二分法と重ね合わされてくる。ジンメルの非進化論的宗教理解や、デュルケムを先取りし、社会と宗教の根源的相互規定を明るみに出す宗教社会学的洞察も、以上の理論的枠組みから生み出された。ジンメルの宗教理論は、同時代ドイツの「流浪する宗教性」(ニッパードイ)の観察に基づくとともに、そうした宗教性をみずから生き、それに一定の哲学的かたちを与えようとした営みであったと言えることができる。

プロテスタント神学者アドルフ・フォン・ハルナックの宗教理論（分担者藁科智恵）。19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍したドイツの神学者ハルナックを彼の「宗教理論」という観点から分析することによって、以下の知見を得ることができる。彼は神学においては、近代プロテスタンティズムの代表的人物として、また同時代において最も賞賛されたと同時に最も攻撃された神学者の一人として知られる。1901年に行ったベルリン大学総長就任講演「神学部の課題と一般宗教史」において神学と宗教学との関係について語ったことから、神学者でありながら、宗教学史においても言及される人物である。この講演においてハルナックは、当時なされた神学部を宗教学部へと改編すべきという議論に対抗する形で、宗教学の自律性だけでなく、存在自体を否定した。キリスト教を知らない人は宗教(die Religion)を何も知らないのであり、キリスト教をその歴史とともに知る人は全ての宗教について知るのだとした。この他宗教理解は当時の神学者からも批判されたものの、彼の講演はドイツにおける後の学問編成へと大きな影響を及ぼし、その結果、宗教学(宣教学)は神学の中でも周縁化され、神学部から、哲学部、さらに文化学部、社会学部へと転置されることへつながったとされる。宗教学の自律性を否定するハルナックを宗教理論という観点から考えた場合、「宗教学を拒否する宗教理論」の意味とは何か、「宗教(die Religion)」として彼が語るものは何か、といった問題が挙げられる。神学もまた広義における宗教についての研究である。現代においては宗派的な宗教研究は学問的でないとする言説が優勢であるが、真逆とも言えるハルナックの議論は現代の宗教研究をめぐる言説状況を批判的に検討する手がかりとなる。

思想家ジャンバッティスタ・ヴィーコの宗教理論（分担者江川純一）。大英図書館をはじめとする文献調査によって、西洋思想史におけるイタリア宗教史学の系譜を検証し、18世紀ナポリの思想家であるヴィーコの宗教理論をめぐる分析を行った。ヴィーコは「宗教(religione)」という近代的な概念を用いて人間文化の歴史的研究と比較研究の重要性を説いた。いかなる国民においても文明は宗教とともに始まることに加え、宗教は人間に秩序を与えるもの、国家存立の基盤となるものであるため、人間の解明には宗教の研究が不可欠であるとするのである。彼は、ユダヤ教とキリスト教の神を除くという限定付きではあるが、諸民族の神觀念の発生を天空の擬人化として説明し、恐れの対象である神々についての語り、すなわち神話と、神々を宥めるために人間が実施する儀礼の連結についても明らかにした。つまり、「宗教(religione)」という近代的な概念を用いた世俗的宗教理論の端緒はヴィーコであるということができる。この観点に立つなら、ヴィーコの仕事を継承して、ユダヤ教とキリスト教をも含めた全宗教を対象として「諸宗教(religioni)」の歴史研究を行ったのが、20世紀のラッファエーレ・ペッタッツォーニであるということになる。イタリア宗教史学におけるこの見解は今後、宗教理論史における重要な知見になるとと思われる。

最後に、以上の個別理論家の再評価は、上の「(1)「宗教の理論化」という営みの歴史的文脈への位置づけ及びその現在の課題の確認」と相関関係にあり、個別理論から理論そのものへの再検討へ、そして理論そのものの再検討から個別理論の再検証へという双方向性を特徴とする研究成果となっていることを改めて述べておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 鶴岡賀雄	4. 巻 20
2. 論文標題 十字架のヨハネの詩をどう読むか - 上田閑照の「言葉」論を参照しつつ -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東西宗教	6. 最初と最後の頁 39-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 江川純一	4. 巻 24
2. 論文標題 近現代イタリアの政教関係ーベッタツツオーニのイタリア共和国憲法批判を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 研究所年報 (明治学院大学国際学部付属研究所)	6. 最初と最後の頁 87-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 江川純一	4. 巻 XXXVII特別号
2. 論文標題 ベッタツツオーニにおける宗教現象学と宗教史学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 宗教学年報 (東京大学宗教学研究室)	6. 最初と最後の頁 219-228
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 鶴岡賀雄	4. 巻 2020年
2. 論文標題 現代世界における「宗教」のヴィジョンー死生学とのかかわりのなかでー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 死生学年報2020	6. 最初と最後の頁 29-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鶴岡賀雄	4. 巻 2020年1月
2. 論文標題 神秘主義の系譜と可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 深澤英隆	4. 巻 2020年
2. 論文標題 哲学的主題としての死後生の問題ーI・H・フィヒテの場合ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 死生学年報2020	6. 最初と最後の頁 49-70
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久保田浩	4. 巻 97
2. 論文標題 「自由に信じること」の宗教史 戦間期ドイツにおける「自由プロテスタンティズム」と「宗教」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 127-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20716/rsjars.97.2_127	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 深澤英隆	4. 巻 29
2. 論文標題 「宗教的人間(ホモ・レギオスス)」/「形而上学的動物(アニマル・メタフジクム)」としての姉崎正治ーショーペンハウアーとの関わりにおいて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 ショーペンハウアー研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江川純一	4. 巻 97
2. 論文標題 ファシスト政権下のイタリア宗教史学	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 宗教研究	6. 最初と最後の頁 3-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20716/rsjars.97.2_3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藁科智恵	4. 巻 43
2. 論文標題 オットー・グロスにおける認識と実践	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国際関係研究 (日本大学国際関係学部国際関係研究所)	6. 最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 久保田浩	4. 巻 55
2. 論文標題 「ドイツ的キリスト者」運動と近代宗教史 ナチズム期ドイツ・プロテスタンティズム史叙述再考のための一試論	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 明治学院大学キリスト教研究所紀要	6. 最初と最後の頁 97-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計53件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 久保田浩
2. 発表標題 公共圏における宗教知の構築—近代ドイツの霊媒裁判を事例に—
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 久保田浩
2. 発表標題 「民族共同体」における女性性と母性－フェルキッシュ・フェミニズムの諸相
3. 学会等名 「日独近代化における 国民文化 と宗教性」第3回ワークショップ（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鶴岡賀雄
2. 発表標題 十字架のヨハネの詩をどう読むか－上田閑照の「言葉」論を参照しつつ－
3. 学会等名 東西宗教交流学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 深澤英隆
2. 発表標題 セッション「自然と霊性－エルンスト・ブロッホの思弁哲学」
3. 学会等名 社会思想史学会第46回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 深澤英隆
2. 発表標題 パネル「エラノスという交差点」
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 深澤英隆
2. 発表標題 ナチ政権期におけるBiozentrismusの問題－Hans Kernをめぐって
3. 学会等名 「日独近代化における 国民文化 と宗教性」第3回ワークショップ（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藁科智恵
2. 発表標題 オットー・グロースと心理学
3. 学会等名 日本宗教学会第80回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鶴岡賀雄
2. 発表標題 スペイン神秘主義の読まれ方 - 思想形成の資源としての詩と体験 -
3. 学会等名 日本宗教学会第79回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 宗教研究の言説空間をめぐって - ヴィーコからペッタッツォーニへ
3. 学会等名 日本倫理学会第71回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 久保田浩
2. 発表標題 宗教的ユートピアの構想 - 近代ドイツの政治的文脈において
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 深澤英隆
2. 発表標題 宗教への拒絶と宗教のミメシス—シュルレアリスムの場合—
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 深澤英隆
2. 発表標題 哲学的主題としての死後生の問題 19世紀ドイツ、そして現代
3. 学会等名 東洋英和女学院死生学研究所第8回連続講座（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藁科智恵
2. 発表標題 ルドルフ・オットーと「宗教現象学」
3. 学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久保田浩
2. 発表標題 「ドイツ的キリスト者」運動史再考 - 個別宗教史叙述の再検討 -
3. 学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鶴岡賀雄
2. 発表標題 「哲学」と「宗教」のはざま
3. 学会等名 新プラトン主義協会第30回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 深澤英隆
2. 発表標題 知識人宗教の運命－ナチ政権下のクラークス・クライス－
3. 学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 深澤英隆
2. 発表標題 「宗教的人間(ホモ・レリギオス)」 / 「形而上学的動物(アニマル・メタフュジクム)」
3. 学会等名 日本ショーペンハウアー協会第36回全国大会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 深澤英隆
2. 発表標題 「宗教経験からの論証」の問題圏
3. 学会等名 日本宗教学会第82回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 IAHRローマ大会におけるペッタッツォーニとヴァティカン
3. 学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 江川純一
2. 発表標題 ペッタッツォーニの最高存在論 その意義と可能性
3. 学会等名 日本宗教学会第82回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藁科智恵
2. 発表標題 R.オットーにおける「宗教史」理解
3. 学会等名 日本宗教学会第81回学術大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藁科智恵
2. 発表標題 ルドルフ・オットーにおける「感情」－CESRの議論と関連させて
3. 学会等名 日本宗教学会第82回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yoshio TSURUOKA
2. 発表標題 How and Why I am Interested in Raimon Panikar
3. 学会等名 Colloqui "Lectures Fons Raimon Panikar" de la Universitat de Girona (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計14件

1. 著者名 上智大学中世思想研究所編、佐藤直子、宮本久雄、津田謙治、出村みや子、佐藤真基子、山田望、矢内義頭、山口雅広、辻内宣博、鶴岡賀雄	4. 発行年 2021年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 352
3. 書名 「原罪論」の形成と展開	

1. 著者名 深澤英隆 (訳)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 444
3. 書名 ゲオルク・ジンメル『ジンメル宗教論集』	

1. 著者名 伊達聖伸・アブデナル・ビダール(編)、鶴飼 哲、中田考、鶴岡賀雄、安藤礼二、渡辺優	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 296
3. 書名 世俗の彼方のスピリチュアリティーフランスのムスリム哲学者との対話	

1. 著者名 平藤喜久子(編)、深澤英隆、久保田浩、鈴木正崇、臼井陽、ベルンハルト・シャイト、クラウス・アントーニ、シルヴィオ・ヴィータ、月本昭男、新免光比呂、松村一男	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 290
3. 書名 ファシズムと聖なるもの / 古代的なるもの	

1. 著者名 久保田浩・鶴岡賀雄・林淳・深澤英隆・細田あや子・渡辺和子(編)、岡本佳子、守屋友江、高橋典史、津曲真一、マーク・テーウェン、三輪地塩、遠藤潤、井関大介、池澤優、杉木恒彦、大内典、池上良正、永岡崇、新里喜宣、白波瀬達也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 480
3. 書名 越境する宗教史【上巻】	

1. 著者名 久保田浩・鶴岡賀雄・林淳・深澤英隆・細田あや子・渡辺和子(編)、比留間亮平、伊原木大祐、木塚隆志、出村みや子、安酸敏真、丸山空大、佐々木啓、大川玲子、山田仁史、林みどり、藤原達也、榎屋友子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 リトン	5. 総ページ数 571
3. 書名 越境する宗教史【下巻】	

1. 著者名 磯前順一、タラル・アサド、酒井直樹、ブラダン・ゴウランガ・チャラン、平野克弥、荒木浩、苅田真司、大村一真、ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク、舟橋健太、ヘント・デ・ヴリース、久保田浩、山本昭宏、松田利彦、汪暉、村島健司	4. 発行年 2022年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 350
3. 書名 ポストコロナル研究の遺産 翻訳不可能なものを翻訳する	

1. 著者名 マレット、フレイザー、ロバートソン・スミス、コドリントン、江川純一、山崎亮、比留間亮平、藤井修平、金瞬、徳田安津樹	4. 発行年 2023年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 488
3. 書名 マナ・タブー・供犠 英国初期人類学宗教論集	

1. 著者名 森本一夫、井上貴恵、小野純一、澤井真、小田淑子、赤堀雅幸、中田考、澤井義次、杉田英明、青木健、市川裕、鶴岡賀雄、深澤英隆、山崎達也、加藤瑞絵、藤井守男、平野貴大、野元晋、菊地達也、吉田京子、青柳かおる、近藤洋平、下村佳州紀、狩野希望、柳橋博之、飯塚正人、松永泰行、大川玲子、三村太郎、小林春夫、矢口直英、塩尻和子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 608
3. 書名 イスラームの内と外から 鎌田繁先生古稀記念論文集	

1. 著者名 袴田玲、村上寛、坂田奈々絵、阿部善彦、鶴岡賀雄、寒野康太、宮本雄	4. 発行年 2023年
2. 出版社 教友社	5. 総ページ数 268
3. 書名 西方キリスト教の女性—その霊的伝承と雅歌の伝統	

1. 著者名 エリック・J・シャープ、久保田浩、江川純一、シュルター智子、藁科智恵、渡邊頼陽、小藤朋保	4. 発行年 2023年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 596
3. 書名 比較宗教学ーひとつの歴史ノ物語	

1. 著者名 伊達聖伸、渡辺優、田中浩喜、江川純一、加藤久子、渡部奈々、西脇靖洋、小川浩之、渡邊千秋	4. 発行年 2024年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 カトリック的伝統の再構成	

1. 著者名 前田良三、ダーヴィッド・ヴァイス、クラウス・アントーニ、ミヒヤエル・ヴァフトウカ、崔正和、カールン・モーザー＝フォン＝フィルゼック、ビルギット・ヴァイエル、久保田浩、深澤英隆、小澤実、齋藤正樹	4. 発行年 2024年
2. 出版社 勉誠社	5. 総ページ数 247
3. 書名 彷徨する宗教性と国民諸文化ー近代化する日独社会における神話・宗教の諸相	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鶴岡 賀雄 (TSURUOKA YOSHIO) (60180056)	清泉女子大学・文学部・非常勤講師 (32632)	
研究分担者	深澤 英隆 (FUKASAWA HIDETAKA) (30208912)	一橋大学・その他部局等・名誉教授 (12613)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	江川 純一 (EGAWA JUN'ICHI) (40636693)	明治学院大学・国際学部・研究員 (32683)	
研究分担者	藁科 智恵 (WARASHINA CHIE) (60868016)	日本大学・国際関係学部・助教 (32665)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
	韓国	ソウル大学校		
ドイツ	テュービンゲン大学	ブレーメン大学	ボーフム大学	他1機関
ノルウェー	ベルゲン大学			